

相生市立図書館

図書館ゆうびん YA向け

2024年 夏号



〒678-0053 兵庫県相生市那波南本町11番1号

TEL 0791-23-5151



国際アンデルセン賞

児童文学に貢献した人へ贈られる国際的な賞。別名「小さなノーベル賞」。

二年に一度受賞者が選ばれ、日本人ではこれまでに

作家賞でまどみちおさん（1994）、上橋菜穂子さん（2014）、角野栄子さん（2018）

画家賞で赤羽末吉さん（1980）、安野光雅さん（1984）が受賞しています。



『魔女の宅急便』角野 栄子//作 林 明子//絵 福音館書店 91-カ

一人前の魔女になるため、修行に出るキキ。お伴は黒猫のジジ。スタジオ・ジブリで映画化され、いまや世界で愛される作品。シリーズには続きがあり、キキの恋愛や結婚、彼女が母親になるところまで描かれています。だれと結婚したかって？それはもちろん…♡



『スーソの白い馬』大塚 勇三//再話 赤羽 末吉//画 福音館書店 P

『だいくとおにろく』松井 直//再話 赤羽 末吉//画 福音館書店 P-マ

なつかしさに胸がきゅんとしませんか。こちらは日本人で初めてアンデルセン賞を受賞された赤羽末吉さんの絵本。白馬を愛するスーソの優しい手つきや表情。迫力のある、あふれる川やおそろしい鬼。絵本が恋しくなったら、いつでも図書館へどうぞ！



『アンデルセンの夢の旅』

ハインツ・ヤーニッシュ//文 マーヤ・カステリック//絵
天沼 春樹//訳 西村書店 P-ヤ

アンデルセン賞の由来である、デンマークの作家ハンス・クリスチャン・アンデルセンの伝記絵本。「人魚姫」「マッチ売りの少女」など、多くの作品を生み出した。

『おばあちゃんのにわ』ジョーダン・スコット//文

シドニー・スマス//絵 原田 勝//訳 偕成社 P-ス

毎日おばあちゃんの家で朝ごはんを食べる「ぼく」。庭でとれた野菜がならぶ食卓。雨の日の散歩。ふたりの言葉にならないかけがえのない時間を描く。

今年の受賞者

作家賞：ハインツ・ヤーニッシュ（オーストリア）

画家賞：シドニー・スマス（カナダ）





Interview with a teacher !

インタビューに答えてもらったのは、矢野川中学校の山本先生です。

音楽と家庭科を担当されています。 (2024年6月現在)

Q1 どんな中学生・高校生でしたか？

A1 小さい頃から音楽が好きで、中学生になるとピアノが人生の友のように感じていました。耳コピも得意だったので、好きな曲を色々と弾いていました。ピアノの腕をもっと磨こうと思い、県立西宮高校音楽科に進みました。音楽専門の授業や実技レッスンが多く、高いレベルの同級生に囲まれ、ついていくのに必死でした。



Q2 当時の人間関係や恋愛について教えてください。



A2 中学生の頃の友人とは、今も関係が続いています。優しくて思いやりがあり、一緒にいてほっとする存在でした。今ではママ友として互いに子育ての話が弾んでいます。恋愛では、色々な人を好きになったものの、勉強やピアノの練習に明け暮れる日々で、「他の人は自分よりもっとやっているはずだ」「負けたくない」という気持ちが強く、「今は恋愛なんてしない」と強がっていたように思います。

Q3 いつ今の仕事に就くことを決めましたか？

A3 高校2年生の秋です。コンクール優勝を目指してしのぎを削る環境の中で、徐々に「これは私のやりたいことではない」と思うようになりました。人に勉強を教えるのが好きだったので、ピアノ講師の勧めもあり、ピアニストから音楽の先生に進路を変えました。入試科目は倍以上になり、思い詰めて明石海峡の近くで途中下車し、海をぼーっと眺めていたこともあります。人生で最初の壁でした。猛勉強の末、第一志望の神戸大学に合格しました。心から願えばどんな困難も乗り越えられるのだと思いました。

Q4 中学生・高校生の頃、どんな本を読みましたか？

A4 中学生の時は『リンの谷のローワン』シリーズ、『ナルニア国物語』などファンタジーや冒険ものが好きでした。高校生の頃はアガサ・クリスティの探偵小説をよく読んでいました。

Q5 中学生・高校生の頃の自分にどんな言葉をかけたいですか？

A5 目標に向かって自分の全てを注ぐ生き方は、かっこいい。誇りに思いましょう。その上で、志望校合格は、ゴールではなく、あくまで通過点です。音楽の先生になるという夢は確かに叶ったけれど、それで学びが止まるわけではありません。学びとは一生続く、長期戦です。子どもたち一人一人が輝ける授業を作りたい、震える合唱を作りたい…夢はむしろたくさん生まれました。死ぬまで夢を持ち続け、全力で挑み、人に勇気を与えられるような人生を目指して頑張っているよ！

素敵なお話をありがとうございました！

山本先生おすすめの本はYAコーナーにあります。

ぜひ読んでみてください。



『ローワンと魔法の地図』エミリー・ロッダ//作 さくまゆみこ//訳 あすなろ書房 93-ロ

『ライオンと魔女 ナルニア国物語』C・S・ルイス//作 瀬田貞二//訳 岩波書店 93-ル

『オリエンタル急行の殺人』アガサ・クリスティー//著 中村能三//訳 早川書房 933-ケ

夏を楽した準備はできていますか？

夏に読みたい冒険物語

『スキマワラシ』 恩田 陸//著 集英社 F-オ



兄の太郎と古道具屋を営む散太は、物に触ると過去を読み取れる能力を持っている。ある日彼は一枚の古いタイルから亡くなった両親の姿を読み取った。タイルは神戸で解体された建物のものだった。両親の死の真相を知るため、全国に散らばった残りのタイルを探す兄弟は、解体現場に現れる少女の靈の噂を耳にする。散太は少女が自分たち家族に関わりがあるのではと考えるが…。ファンタジックなミステリー。

『四畳半タイムマシンブルース』 上田 誠//原案 森見 登美彦//著 KADOKAWA F-モ

8月、猛暑の京都。エアコンのリモコンが壊れ、絶望していた「私」。そんな時タイムマシンで未来からきたという青年が現れた。ここで最も有意義なタイムマシンの使い方は、リモコンが壊れる前に行き、涼しさを取り戻すことだ。後輩の明石さんと計画し、悪友どもを昨日へ送り出しが、過去を改変したことで未来が変わってしまい、このままでは世界が大ピンチ…？つじつま合わせに奔走する彼らはリモコンを、未来を救えるのか。



挑戦・成長する夏！

『青いスタートライン』 高田 由紀子//著 ふすい//絵 ポプラ社 91-タ

出産のため母が入院し、佐渡の祖母の家で夏休みを過ごすことになった颯太。母と赤ちゃんの体調、家族と離れること、友だちの中学受験、いつも周りに合わせてしまう自分の性格、いくつもの心配事とともに佐渡に到着した。祖母の家でいとこのあおいが参加した遠泳大会の映像を見た颯太は、彼女の泳ぎに憧れる。25メートルしか泳げない颯太だが、地元の青年夏生に特訓され、1キロの遠泳に挑戦する。



『死にたかった発達障がい児の僕が自己変革できた理由』 西川 幹之佑//著 時事通信社 916-ニ

4代続けて東大卒という超名門の家に生まれたものの、ADHD、アスペルガー、学習障がいを持ち、幼稚園すら二時間で退園させられた著者。小学3年生からは通常学級で学ぶが、友だちとトラブルを起こし、パニックになって教室を飛び出す毎日。そんな著者が変わったきっかけは、麹町中学校に入学し、大胆な学校改革を実践していた校長の工藤勇一先生に出会ったことだった。「自律」を学び、劣等感や周囲への憎しみから解放され「自己変革」に挑む著者。大人にも子どもにも、すべての人に勇気を与える一冊。



となりのページでインタビューに答えてくれた、山本先生のおすすめの本です！

夏に読みたいホラー小説

『湖の中のレイチェル』 K.R.アレクサンダー//作 金原瑞人 小松かほ//訳 小学館 93-7

両親の不仲や成績不振、友だちとのいざこざ。サマンサはストレスを友だちのレイチェルにぶつけ、湖に突き落としてしまう。ずぶぬれにして笑ってやろうと思っただけなのに、レイチェルはそのまま浮かんでこなかった。ところが翌日、学校にはレイチェルの姿が。おびえるサマンサに、レイチェルはいつも通り優しく接してくれる。しかし、彼女の足元には不自然な水たまりができていて…。サマンサの恐怖の日々の始まりだった。

『黒猫 ホラー・クリッパーシリーズ』 エドガー・アラン・ポー//原作 にかいどう 青//文
スカイエマ//絵 ポプラ社 93

人間の心に潜む狂気を描く表題作「黒猫」。ドッペルゲンガーの自分と戦う「ウィリアム・ wilson」。パンデミックの恐怖「赤死病の仮面」。日本の作家にも大きな影響を与えた19世紀のアメリカの作家、ポーの短編集。ポプラ社のホラー・クリッパーシリーズは海外の名作を日本の人気児童文学作家が読みやすく再話したシリーズです。



『吸血鬼ドラキュラ』 ブラム・ストーカー//原作 三田 信行//文 鈴木 し乃//絵 93

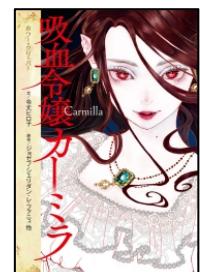
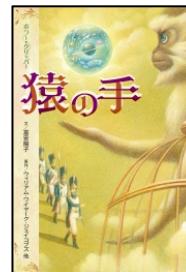
『猿の手』 ウィリアム・ワイマーク・ジェイコブズ//原作 富安 陽子//文 アンマサコ//絵 93

『フランケンシュタイン』 メアリー・シェリー//原作 松原 秀行・瀧口 千恵//文 泉 雅史//絵 93

『吸血令嬢カーミラ』 ジョゼフ・シェリダン・レ・ファニユ//原作 令丈 ヒロ子//文 8あや8//絵 93



美しいイラストにも
注目あれ！



夏を彩る詩の本

『落雷はすべてキス』 最果 タヒ//著 新潮社 911.5

さみしい。誰かとつながりたい。でも面倒くさいし、このままでもいいような気もする。
最果タヒさんの詩からはそんな感情が伝わってくる。

誰かを愛することを、そんなに肯定的に見做さないでほしい。

さみしさは殺意、恋愛はそれをぶつける相手を見つけるための、言い訳だ
大丈夫だよ、きみが読んでいる本はきみのことをひとつも理解していないから
どきりとする言葉があふれる詩は、少しうまい夏の終わりに似合います。

